新刊紹介

増田研・梶丸岳・椎野若菜（共編著）『フィールドの見方（FENICS100万人のフィールドワーカー第２巻）』古今書院、2015年

川喜田二郎は名著『発想法：創造性開発のために』（中公新書、1967年）において、科学を「書斎科学・実験科学・野外科学」の３つに分類した。このうち野外科学の部分がいわゆるフィールドワークを伴う分野にあたるが、現場で資料を集め、資料に依拠して発想を得るという点においては、文系も理系も同じである。

本書『フィールドの見方』は、古今書院から刊行中の「100万人のフィールドワーカー」シリーズの第２巻として刊行された。執筆者は植物学、言語学、考古学、氷雪学、人類学、医学、工学と、幅広く集められた。もともと、本書の企画を進めたFENICS（Fieldworker's Experimental Network for Interdisciplinary CommunicationS）は、学問分野にとらわれないフィールドワーカーのネットワークとして結成されたものである。増田はこのシリーズ全体の企画段階から参加し、とくに第２巻、第３巻（共同調査のすすめ）、第４巻（現場で育つ調査力）について深く関わっている。増田が東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究「社会開発分野におけるフィールドワークの技術的融合を目指して」の代表をしていたことも背景にある。

第２巻のタイトルである『フィールドの見方』の「見方」の部分には２つほどの意味がある。まずは「学問分野が違えば見え方も違ってくる」あるいは「見たいものが違えば、見えるものも違う」ということの確認。同じように植物に関心を持っていても、植物学者は「生物としての植物」にこだわりをみせ、農学者はその「生産から流通へ」というより社会的な側面に関心を寄せる。このような「見え方の違い」がひとつ。

「見方」に込めたもう一つの意味あるいはメッセージは、「見たいものがあるのなら、その見方はいかように選びうる」ということである。本書の第３部には、見たいものがはっきりしているために学問分野へのこだわりを簡単に手放してしまった人々が登場する。霊長類学者から医師に転向し、マラリア問題に取り組むために人類学に手を染め、果ては経済学にも取り組む塚原氏（第８章）などはそ

の一例である。あるいは数式的なアプローチを得意とするのに、いつのまにかバングラデシュのコミュニティーにどっぷりと関わってしまった坂本氏（第10章）等の事例もある。フィールドワークというのは、あくまでも「フィールドから着想を得て、フィールドから学ぶこと」だから学問分野の違いにとらわれると損をする。多文化社会学部からは野上建紀先生にも執筆していただいている。

フィールドワークは学問に留まらず、人生のいろんなところで応用することができる。公務員でも、会社員でも、警察官でも、フリーターでも、みんな「フィールドからの発想」はあるはずだ。あるひとつの「見方」に留まっていること、あるいは、ある特定の学問分野、立場、身分にとらわれていると人生大いに損をすることになる。

（増田　研）

滝澤克彦『越境する宗教　モンゴルの福音派―ポスト社会主義モンゴルにおける宗教復興と福音派キリスト教の台頭』新泉社、2015年

冷戦期に社会主義諸国において試みられた「科学的無神論」という宗教に関わる「実験」は、それがある特定の宗教ではなく「宗教」そのものを社会から徹底的に排除しようとした点において、歴史上類を見ないものであった。当然、それが現代宗教史に残した痕跡は計り知れない。しかしながら、その「実験」の歴史的帰結と今日的意義について分析した研究は極めて限定的である。

本書は、70年近くにわたる社会主義を経験したモンゴル国において、社会主義体制崩壊後に台頭してきた福音派キリスト教の事例を分析することによって、社会主義の歴史が今日のモンゴル社会に及ぼしている影響を明らかにしようとしたものである。モンゴル国では、1990年の民主化によって信教の自由がもたらされると、仏教やシャマニズムなど既存の宗教が復興するとともに、外国からそれまでなかった宗教が新たに流入してきた。なかでも福音派キリスト教はもっとも大きな勢力であり、現在では教会数が500ほど、信徒数も300万の人口に対して８～９万人に達するという。

このような社会主義のあとの「宗教の復興」は、主にロシアや東欧などを対象に論じられてきた。その現象は、まず「世俗化」に懐疑的な研究者たちによって、その一つの反証材料として積極的にとり上げられた。つまり、社会主義による無

神論プロパガンダや近代主義によってさえ宗教はなくなることはなかった（ゆえに、宗教は人間に本質的なものである）、という主張である。しかし、これらの論争は結局のところ、「宗教」に対する主観的な立ち位置、つまり肯定的／否定的な感覚そのものに規定されている部分が大きかった。

世俗化論に引き続くもろもろの議論においても、社会主義のあとの宗教のあり方を把握しようとする試みは、おおむね西側の社会を対象に練り上げられてきた概念と枠組をポスト社会主義社会に当てはめようとするものであった。社会主義という歴史との関連で論じられる場合にも、その「宗教復興」は、社会主義イデオロギーの喪失によって生じた「真空状態」の結果として、つまり体制移行期の過渡的な副産物として捉えられることが多かった。

それに対して本書は、社会主義体制崩壊後に、既存の宗教だけではなく外国から新たに越境してきた宗教がモンゴルで勢力をのばしつつある事実に注目している。このような現象は、社会主義のあとの宗教状況が、単なる既存の宗教の「復興」という枠組みでは捉えきれないことをまさに表しており、本書はそこに社会主義という歴史の有意性を認めようとした。つまり、人々の概念や記憶、習慣や社会組織などのあらゆる領域に深く刻み込まれた社会主義の歴史的痕跡が、キリスト教受容の一つの重要な基盤となってきたことを明らかにしている。

例えば本書では、社会主義による長期にわたる反宗教政策が、皮肉にも「宗教」という概念をして人々のアイデンティティや世界観に重要な位置を占めさせるに至った、という歴史の逆説を描き出している。モンゴルの福音派キリスト教徒たちは、自らの信仰を「宗教ではなく、神との直接的な関係である」と主張するが、このような表現は、社会主義が説き続けてきた「迷信」としての「宗教」を乗り越え、「宗教」でも「無神論」でもない新たな「何か」を探求しようとする人々のあり方を表している。キリスト教への改宗に際して、信徒たちは、仏教的伝統が埋め込まれた習慣や社会関係と対峙し、そこに生じる様々な葛藤やあつれきを解決することで「宗教」を乗り越えようとする。そこには社会主義の歴史が深く関わっているのである。

このように、本書は社会主義という経験の歴史的有意性を論じたものであるが、一方で、それは「社会主義」そのものを描き出そうとするものではない。本書の意図は、モンゴル国を対象に、「ポスト社会主義」という状況で起きている事態を、グローバル化の進展する今日における宗教の一つの様態として捉えることである。そのような意味で、社会主義という「宗教」に関わる歴史的実験自体、「宗教」という言葉を通じて世界に関与しようとする人間の営みの一つとして理解されるべきであろう。宗教学を含めたそのような営み自体が、今日の世界において

どのような位置を取り得るかということについても、「ポスト社会主義」は極めて重要な示唆を与えてくれるはずである。　（滝澤克彦）

王維『華僑的社会空間和文化符号―日本“中華街”研究』広州：中山大学出版社、2014.

This book examines Chinatowns of Japan with a focus on the social space, cultural symbols and ethnicity of Overseas Chinese in the country. A number of theories have been consulted and employed such as the concepts of Contact Zones, Social Space and Tourism Resources in order to have an in-depth analysis on the cultural activities and characteristics of Chinatowns in Japan's Overseas Chinese community.

There are three major Chinatowns in Japan, i.e. Yokohama Chukagai, Nanjing Machi of Kobe as well as Nagasaki Chukagai. Different development trajectories could be observed in the three Chinatowns due to the differences in their history, community scales and their interactions with local host society. The relationship between Chinese communities with local society and their Japanese neighbors could thus be vividly described as relatives (Nagasaki), friends (Kobe) and neighborhoods (Yokohama), showing a special social and cultural scenario exhibited in the three Overseas Chinese communities, and such a social and cultural scenario was gradually formed through the interactions between Chinese and local host society in different historical and cultural social spaces.

Different from Chinatowns in other parts of the world, traditional Chinatowns in Japan are not exclusive communities dominated by Chinese. For instance, few Overseas Chinese are currently living in the Chinatowns of Nagasaki and Kobe while most of the local residents are Japanese. Unlike Chinatowns in New York or other cities, Japan's Chinatowns could never become economical centres for local Chinese as well as hubs congregated by new Chinese migrants. As a result, hardly could it be termed as “Ethnic Minority Economic Niche”.

The author points out that Chinatown is a social space which generates culture. A traditional Chinatown in its capacity of a community (social space) was

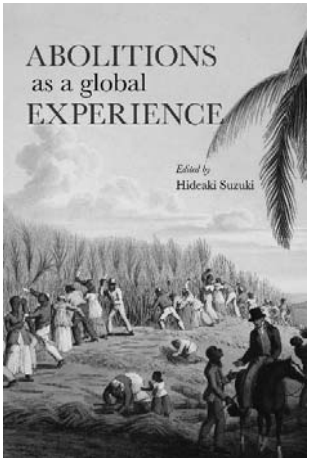
gradually formed in accordance with the traditional Chinese custom, and the internal and external social connections of Chinatown in turn constitute its social functions and social significance. Inhabitants in the community have greatly changed the Chinatown in terms of the social space through various efforts and practices since 1980s, and different kinds of "capital" played a key role in the process. In other words, the most striking difference exhibited by Japan's Chinatowns is their localization, assimilating into the local Japanese society.

One of the key aspects discussed in the book is the Overseas Chinese culture represented by religious worship and performing art, which are symbolic cultural insignias and are extremely important in terms of the changing ethnicity. In addition, the traditional religious worship activities held in the Chinese temples and organised by the Chinese locality associations are also explored in the book. Religious worship not only provides Overseas Chinese with imagined root-seeking religious ceremonies and social gathering opportunities, but also a social space to build up and maintain various networks peculiar to the Chinese community. Consequently, temples and religious worship activities have jointly become the identity symbols for local Overseas Chinese. Another important aspect examined in the book is the Neo-traditional Culture which has jointly been recreated by Chinatowns of different places and local societies since 1980s. A special relationship between Japan's Overseas Chinese community and local society and a novel cultural scenario can evidently be shown by the recreated cultural symbol "Neo-traditional Worship and Performing Art". Traditional performing art accompanying the religious worship, however, gradually declined due to the transformation of Overseas Chinese community and was eventually replaced by the neo-traditional performing art. The transformation of social space in the Overseas Chinese community, the cultural interactions among themselves, as well as the significance and functions represented by traditional cultural insignias could thus be observed in the interactions among traditional worship activities, traditional performing art and neo-traditional performing art.

In short, different disseminating trajectories of Chinese culture in Chinatowns of different places such as Nagasaki, Kobe, Yokohama, London and San Francisco could clearly be observed through the analysis and comparisons of different Chinatowns and local cultures. Meanwhile, interactions between Chinese migrant communities and local host societies and their social and cultural situ-

ation are also demonstrated.　（Wang Wei）

Hideaki Suzuki (ed.), *Abolitions as a Global Experience*, NUS Press: Singapore, 2016.



本書は、2012年に東京で行われた国際会議「世界史の中の砂糖と奴隷 Sugar and Slave in World History」の一部として筆者が企画した「世界史的共通体験としての奴隷制廃止 Abolitions as a Global Experience」を基礎にして作られた論文集である。

この会議は、科研費プロジェクト「新しい世界史の構築」（代表　羽田正東京大学教授）の一環として行われたものなのだが、そこでは、そもそもは従来型の日本で一般的な各国史をジグソーパズル状に寄せ集めた世界史でもなく、また、特にアメリカでみられるような現在のグローバル化を説明するためのグローバル・ヒストリーでもない「新しい世界史」の可能性が追及された。これに関して、筆者は次のようなことを考えながら、上のような企画、さらには本書を編集するに至った。

奴隷という存在が歴史上いつ誕生したのかについては諸説あるが、たとえば、紀元前3000年ごろのメソポタミアの粘土板碑文に奴隷交易の存在が示唆されている。これに対して、18世紀から19世紀の世紀転換期に英仏で奴隷制や奴隷交易が配されて以降、世界の各地でそれらが廃止されていき、二十世紀前半中には世界の大部分で奴隷交易と奴隷制が少なくとも法的に消滅した。この現象を一体どのように理解すればよいのだろうか。つまり、わずか百数十年のうちに、それまで何千年と各地で続いたひとつの制度とそれを支える交易が消えてしまったのである。奴隷制と奴隷交易のこのわずかな期間での法的な消滅を「世界史的共通体験」として捉え、その実態を明らかにすることで、上に述べたような「新しい世界史」のひとつの可能性を見出そうとしたのがこの企画のそもそものきっかけである。

イギリス、オランダ、イラン、カリブ海、中国、フランス、仏領西アフリカ、ロシア、そして日本の事例研究を扱う各章はそれぞれの分野でも大変興味深い視点を提供してくれた。そのことは執筆者がそろった時点ですでに確信を持っていたのだが、加えて筆者が編者として特に留意したのは、各章のあいだの連関である。正直なところ、これまで接してきた多くの論文集について、そこに含まれる

ばらばらの各章がなぜ一冊の本の中に収められるのかよくわからなかった。できるだけそういう違和感を解消したかったので、執筆者には原稿を出してもらい、筆者が読んだ時点で、それぞれの執筆者に関連しそうな章をリストアップし、執筆者間で読んでもらい、できる限り関連する章について本文中で言及してもらうようにお願いした。それによって、執筆者自身もその連関に気付くだろうし、あるいは、編者の思い込みがただされることもあるだろう。そして何よりも上に書いた違和感が解消され、加えて論文集に一体感が生まれ、ある章を読む読者は別の章に自然と誘われるのではないか、そんな期待もあっての試みであった。果たしてそれがうまくいったかどうかについては、ぜひ本書を手にとって確認していただきたい。

本書全体から浮かび上がってくるのは、グローバルな連関とローカルな諸条件との交錯の実態である。たとえば、イギリス国内における奴隷制廃止運動は、現実の奴隷制がいかなるものかというリアリティを欠いたまま、国民運動化していったのだが、イギリス帝国内での奴隷制廃止が実現されると、世界に散らばる「野蛮な」奴隷制や奴隷交易から人々を救い出す、いわば「文明化の担い手」としてイギリス国民意識の一環が醸成されていく。しかし、他方で、たとえば、インド洋で行われた奴隷交易廃絶のための活動は、動員された海軍によって報奨金獲得の手段と化していき、現地の奴隷以外の交易にも大きな打撃が与えられていった。つまり、イギリスの活動というひとつのグローバルな連関の原動力は、ローカルな諸条件を前に、一貫した作用をもたらすのではなく、常に変化をしながら、そのグローバル性を保っていたのである。それはフランス帝国の動向を見ても同じことがいえる。そのようにして生まれるねじれこそが、この世界史的共通体験を生み出したといえよう。言い換えるならば、たとえば、イギリスにおける廃止運動で活動家たちが主張した人種間の平等であるとか、人権概念とかの崇高な理想は、多様な現実の前で捻じ曲げられていったのである。ここでいう多様な現実とは、なにも世界各地の個別の状況を意味するのではない。むしろ、そうした個別の状況にグローバルな力がかかわっていく状態の総体を指している。たとえば、フランス領西アフリカでは植民地化の完成までは、現地の有力者の協力を仰ぐために奴隷制が温存され、完成するや否や、彼らの力を削ごうと奴隷制が廃止されていった。崇高な理想の世界標準化ではなく、こうした現実の中に奴隷制と奴隷交易の廃止を見出すとき、私たちはたとえば、それと現代奴隷制 modern slavery と呼ばれる一連の状況との不可分な連続性を直視することになり、決して幸せではない「世界史的共通体験」の中に生きていることを自覚するのである。

（鈴木英明）

波佐間逸博 著『牧畜世界の共生論理―カリモジョンとドドスの民族誌』京都大学学術出版会、2015年

アフリカ大陸の北東地域には、東リフトバレーに沿ってサバンナ帯の植生景観が広がっています。そこでは牛、山羊、羊、ラクダ、ロバなどの群居性の有蹄類と人びとが共存する生業が営まれてきました。わたしは1998年から、この裂谷の上部、ウガンダ共和国北東部に居を定め、家畜との共生生活を維持してきた東ナイル系の民族、カリモジョン（Karimojong）とドドス（Dodoth）の人びとの土地に住み込み、生態人類学調査・研究をおこなってきました。本書では、彼らが牧畜家畜とのあいだにどのような共生的関係を結んでいるのかを、家畜認識と分類、コミュニケーション、放牧、牧歌、レイディングなどの諸側面から明らかにし、それが牧畜民の生活論理の構成においてどのような役割を果たしているのかを明らかすることを試みました。

「第１章　牧畜世界への接近」では、まず、東アフリカにおける牧畜の起源に、考古学や生態学、人類学の先行研究を参照して迫りました。牧畜がどのように柔軟性と遊動性を帯びた形で人びとに受け入れられていったのかを示し、カリモジョンとドドスの概要（自然環境や言語環境、居住および生業形態、社会構造）を紹介しています。

カリモジョンとドドスの人びとは、ケニアや南スーダンとの国境付近、カラモジャ地方と呼ばれる半乾燥地に居住しています。ウガンダ国内でもっとも乾燥しているカラモジャでは安定した降雨は期待できず、農耕は単独で人びとの生活を支える生業とはなりえません。彼らは、ジエ（Jie）、ポコット（Pokot）などといった近隣の民族集団とともに、牛、山羊、羊を中心にした牧畜に依存した生業を営んでいます。生活圏の中心は家族成員の大部分が居住する半定住集落で、家畜の放牧の拠点もここに据えます。乾燥がすすむと、少数の青年男性が中心になって家畜群とともに頻繁に移動しつつ、一時的に牧草や水場に近い場所に居留する家畜キャンプを構築します。家畜の放牧は、囲いと放牧地を往復する、日帰り放牧が中心です。男の子は10才前後になると、山羊や羊の放牧を任せられるようになります。牛の放牧は、移動距離が20キロメートル前後と長く、給水作業や略奪の危険もあり、青年男性が担当します。

このカラモジャ地方に居住する東ナイル系の牧畜集団は、彼ら自身、農耕民や狩猟採集民との対比において、「家畜とともに生きる者」として自己規定するように、乾燥地に適応した牧畜という生業に強く依存し、生存の基盤をなす牛をはじめとする牧畜家畜に至上の価値を付与するという、民族集団間の違いを越えて共有された特徴が存在します。さらに彼らは、通婚や共住、放牧地の共有、家畜交換をつうじて個人レベルでのネットワークを形成しています。気候変動の著しい環境では、良好な牧草地や水場の在りかは年や季節に応じて変わってきます。そのため特定の集団が特定の場所を排他的に占有することには生存戦略としての有効性はなく、東アフリカのサバンナでは、地域に共在する複数の集団がゆるやかに土地と結びつき、人びとの移動と資源の利用を許容しあう相互依存的な社会交渉が基礎となっていることも特徴的といえます。

「第２章　家畜を見るまなざし」では、牛、山羊、羊の、性・成長段階、体色、耳型、角型、焼印などによる分類体系、家畜の習慣的な行動などの類別的な特徴が、識別するという行為とどのように関連しあっているのか、そして、放牧や搾乳の場面でそのような知識と実践がどのように活用されているのかを記述しました。「牧畜民なら、誰も家畜のことを忘れることはできない。家畜は、わたしたちの血の中に入りこんでいる」とカリモジョンやドドスが語るように、彼らは家畜を一頭一頭、独自の存在として個体識別し、毎日の搾乳や放牧を通してコミュニケートしています。搾乳を任されるようになる４、５才の幼い子どもでさえ群れの母牝の一頭ずつを識別しているばかりか、その母子関係をとても正確に記憶しており、数百頭いる囲いの中から特定の乳飲み子と母牝を引き合わせることができます。

人間の成長は家畜とのかかわりと関連づけて表現され、また、個人への命名は家畜の体色への愛着により決定されます。このようにカリモジョンとドドスの牧畜家畜と人びとは、その生誕から、ともに存在しあうことによって育ち、老成し、死にゆくわけです。個人の成長やアイデンティティの確立は、牧畜的な日常生活に埋め込まれた形で果たされていきます。

「第３章　コミュニケーショナルな個体性」では、放牧と搾乳といった日常の牧畜生活の成立について、人間と家畜の相互行為の観点から解析しました。

カリモジョンの山羊群の日帰り放牧を調査した結果、収容される家畜囲いをおなじくする個体と、放牧中に近接する傾向をもっていることが明らかになり、人間の側はその家畜群の自律性にまかせた放牧管理をおこないます。放牧においてひとまとまりの「家畜の群れ」が形成され、それに牧童が連れそう光景には、人間と家畜のまさにインタラクティヴで応答的な行動連鎖の束が表現されています。

その具体例として、人間と家畜間における身体と声のコミュニケーションの様相を分析しました。放牧中や搾乳中の牛と山羊はともに、牧童の声による呼びかけに対して正しい行動反応をもって応答します。たとえば、「ハイ！」は、放牧の時、集落に戻ろうとする牛に「止まって、草を食べろ」と呼びかける声です。また、山羊の群れを集めて前進および歩行速度をアップさせる時には、「アイ！」や「シ！」と発声しつつ、手や牧杖を振り上げるといった大きな身ぶりによって、視覚的なディスプレイを繰り出します。このような牧童が発する声に対して、牛や山羊が正しく反応した応答の比率は80％以上ときわめて的確に反応していることが分かりました。また、牛の名前呼びテストでは、牧童が牛の名前を呼んだとき、周囲の個体が反応しない中で、対象の個体だけが正確に応答していました。これらは、放牧や搾乳といった日々の牧畜生活をとおして、人間と家畜の相互行為の経験とその記憶を共有していることではじめて実現されます。カリモジョンとドドスにおける家畜の個体性には、単に他との違いを体現する実体であることを越えて、実体的差異には完全に回収しきれない〈かけがえのない個〉という感覚の基礎が内包されており、牧民と家畜がともに牧畜生活での関心を共有し、生身の存在として共振しあう相互性こそは、そのような個体の置換不可能性を産出する基盤となりうると考えられます。家畜が牧民の身体に共鳴的に働きかけてくる主体である限り、動物的他者と関わることと、人間的他者と関わることとの間には、絶対的な隔たりは存在せず、牧畜世界の社会性は、牧民が家畜を自分自身に向きあう人格として理解しながら家畜と向きあい、両者がこの事実を知っているというコミュニケーション行為によって構成されているということであるとみなせます。

「第４章　牧歌―詩としての日常生活」では、カリモジョンとドドスの人びとの牧歌を取り上げました。歌には社会の成員に広く共有されるエエテと、作者以外の者は公の場で歌うことを慎むエモンがあり、エモンの大半は作者の男性が所有する特定の家畜個体に言及します。エモンは、放牧中、家畜の群れを前にしているときに詩を口ずさむことで自然に想起され、家畜にたいして歌いかけられ、家畜は採食行動により没頭できるようになると語られます。その歌詞には、自分が参加した家畜略奪、家畜の贈与や放牧など、焦点個体にまつわる出来事が描写されます。こうした出来事の記憶は、特定個体の＜かけがえのなさ＞をリアルに感じる基礎となり、歌を歌うときに牧民は、自分と家畜との結びつきや、その家畜をめぐっておこなわれた親密な他者との相互行為を想起しており、それをとおして「わたしたちは家畜とともに生きるものである」というアイデンティティを深めていると解釈できます。

「第５章　現代の牧野のランドスケープ」では、カリモジョンとドドスが当事者となって引き起こされる家畜略奪（レイディング）に焦点をあて、東アフリカ牧畜社会の武装紛争をめぐる現状と敵対・同盟などの他者関係について検討しました。ウガンダ・南スーダン・ケニア三国国境地域に位置するカラモジャ地域では、国境を越えて遊動するカリモジョン、ジエ、ドドス、トゥルカナ、ポコット、トポサなど生業牧畜に強く依存した集団が、敵対と同盟をくりかえしてきました。1970年代以降、隣国の破綻国家である旧スーダンと、独裁軍事政権崩壊後のウガンダ中央政府軍から、略奪と交換をつうじて大量の自動ライフル銃がカラモジャに流入して以来、牧畜民集団の間で、自動ライフル銃を用いたレイディングが頻発しました。さらに、このようなレイディングの日常化に対して、ウガンダ政府は80年代からカラモジャ地域に政府軍を派遣して牧畜民の武装解除政策を実施し、人びとは家畜や家族を失うなどの苦境を経験しました。しかし、牧畜民集団の文化的アイデンティティは閉鎖的ではなく、集合的で均質なカテゴリーとしての「敵」と「仲間」の絶対的な対立に基づく全面戦争は存在しません。同盟と敵対の関係性は、個々の具体的な経験を含む状況に応じて柔軟にくみかえられ、同盟関係は空間的な近接や共住経験の共有によって基礎づけられています。つまり、〈かけがえのない個へのアテンション〉をとおして、他者も自己も、具体的な一つ一つの顔へと個別化されることで、「敵」と「仲間」という形で他者と自己を絶対化して切り離し、集合的で均質なカテゴリーが形作られることは未然に抑止されているのです。第６章で述べるように、このように人間と人間の関係を認識する見方は、カリモジョンとドドス社会では、そのカテゴリーの内部で個別に異なっており、存在のそれぞれが、〈かけがえのない個へのアテンション〉をひきつける源であるという点において、家畜と人間の間の関係の認識と同じ構造をとっていると言えます。

まとめの第６章では、牧畜世界の共生論理として、「種を超える個体主義」という概念を提出しました。西アジアおよびヨーロッパの文化研究においては、去勢や放牧などの管理技術を駆使する牧畜の生活実感から着想を得て、奴隷制や社会の監視・統制といった人間統治の方法が開発されたと論じられてきました。それに対して、カリモジョンやドドスをはじめとするナイル系牧畜社会の牧畜民と家畜の共生的な関係を基礎づける論理は、他者支配の論理とは無縁です。日常性の基層となっている家畜と牧畜民の共生的関係（co-living）を基礎づけている、信頼にもとづいて養育するという牧畜民の欲求は、養育される「他者」の欲求の充足ともなるというように、自己と他者の欲求は互いに正のフィードバックの関係にあります。牧畜民と家畜が、このように互いの生の歓喜を相互に媒介しあう

関係にあるとき、家畜の一頭一頭は、特有のセンシビリティを帯びて牧畜民個人と深く疎通します。つまり、「いまここ」を互いに構築する、ほかの存在とは置換不可能な個体性を具現していると考えられます。人が自然に強く依存して生きる時、それが生活実感に密着したものであるがゆえに、人間同士の関わり合い方についての思考の材料を提供することがあります。そうであるならば、ナイル系の牧畜民同士の関係が、自己完結的な表象の介在に依らず、直接的な相互性にもとづいているあり方は、かれらがそのより良い生を希求する、家畜一頭一頭の「顔」に向ける熱い眼に由来していると論定することも可能なのだと考察しました。

（波佐間逸博）